

## 「問い」と「つながり」で学びを深める道徳

### －乗鞍修学旅行でのホンモノ体験を生かした授業実践－

たなか まりこ  
田中 真理子 (中学)

#### I. はじめに

今年度、道徳科においては、「問い」と「つながり」を基軸とした学びを通して、生徒の思考を深める授業実践を行った。対象は本校 77 期生の中学 3 年生である。本授業の題材には、生徒にとって共通の体験である乗鞍高原への修学旅行を取り上げた。乗鞍高原は、長野県松本市に位置する北アルプス南端の高原地帯であり、豊かな自然環境を有している。そのような大自然の中で 5 泊 6 日を過ごした修学旅行という本物体験に、学習としての意味付けを行うことを本授業のねらいとした。その際、生徒の思考過程や認知の在り方に注目することで、認知科学的視点から生徒の学びがどのように深化したのかについて考察することを試みた。

「特別の教科 道徳」では、2019（平成 31）年度の教科化以前から、本物体験を生かした指導の重要性が示されてきた。2015（平成 27）年告示の中学校学習指導要領解説においても、その内容や目標が明確に示されている。しかし、修学旅行という本物体験を道徳の授業に取り入れた実践は、これまであまり多く見られない。

一方、乗鞍高原への修学旅行を終えた生徒の感想文やインタビュー調査からは、修学旅行が自己理解や集団づくりについて深く考える機会となっていたことが明らかになった。その反面、修学旅行の場となった乗鞍高原の「自然」そのものについての学びは十分に深まっていなかったと感じられた。このような生徒の反応も踏まえ、本実践では、内容項目 D-20「自然愛護」を学習内容として設定し、修学旅行と道徳科の学びを関連付けた授業を展開した。そして、生徒が乗鞍高原の自然について多面的・多角的な視点から考え、思考を深められる授業設計を目指した。本実践の意義は、修学旅行という本物体験を道徳科の学習内容と結びつけ、実体験を深い価値理解へと導くプロセスを提示した点にある。特に、生徒の思考過程や認知の在り方に注目し、認知科学的視点から学びの深化を捉えようとしたことに本研究の特徴があると考えられる。

#### II. 授業の記録

##### (1) 授業設計について

道徳科の授業設計においては、ねらいとする道徳的価値やその価値と自己との関わりについて、「生徒が考え、実生活での道徳的行動につながる学習内容であること」が求められている（文部科学省 2017）。そのため、本実践では内容項目 D-20「自然愛護」、とりわけ乗鞍高原の自然に対して素朴な感想程度に留まっている生徒の学習実態を出発点とした。生徒が自己を見つめ、自然を多面的・多角的に捉え、これからの自己の生き方を深められる学習内容とした。また、「問い」と「つながり」を基軸とした本実践では、時間軸（過去・現在・未来）とともに、本研究会の研究の柱である生徒同士の「学び合い」や「生徒が自走すること」を意識しながら授業設計を行った。具体的には、表 1 に示した観点から「問い」と「つながり」を捉えた。

表 1 本実践における「問い」と「つながり」

問い	つながり
①【過去】 生徒の生きた感想やインタビューからの問い	①【過去→現在→未来】 修学旅行という本物体験とつなげる道徳
②【現在】 授業内での生徒個人の自己内対話的な問い	②【現在・未来/学び合い】 生徒同士の対話的つながり
③【現在/学び合い】 授業内で生徒がクラスメイトと共有する問い	③【過去→現在→未来】 乗鞍高原とのつながり
④【未来/自走】 今後も考え続ける問い	

乗鞍高原の自然についての生徒の学びを深めるために、表 1 の観点を意識し、二時間構成で授業計画を立てた。しかしながら、すでに修学旅行から 5 か月以上が経過しており、生徒にとっては突然の修学旅行を題材とした授業となるため、生徒の記憶を想起する工夫が必要である。そこで、教材には現地教

表2 本実践での学習内容（教育研究会前に3年C組で実施）

時間	学習活動	学習内容
第1時	学び合う	(1) 乗鞍高原の課題について知る。 (2) 乗鞍高原の自然を持続可能なものにしていこうとする藤江佑馬さんの生き方に触れ、自然と自分の生活とのつながりについて考える。
第2時 【本時】	学び合う 自走	(1) 前時を振り返る。 (2) 乗鞍高原 将来ビジョン「のりくら高原ミライズ」について考える。 (3) 乗鞍高原の自然を守るために、自分たちができることを考える。

表3 修正後の学習内容（教育研究会当日に、3年D組で実施）

時間	学習活動	学習内容
第1時	学び合う	(1) 乗鞍高原の課題について知る。 (2) 乗鞍高原の自然を持続可能なものにしていこうとする藤江佑馬氏の生き方に触れ、自然と自分の生活とのつながりについて考える。
課題 ※授業外	学び合う 自走	・第1時の学びをまとめる「乗鞍新聞」の作成 ※学級で違う班に属する授業者が指名した4名が、A4サイズ1枚の新聞作成を行う。 ※完成した新聞を第2時の導入で配布し、発表する。
第2時 【本時】	学び合う 自走	(1) 生徒が作成した「乗鞍新聞」を用いて前時を振り返る。 (2) 乗鞍高原 将来ビジョン「のりくら高原ミライズ」について考える。 (3) 乗鞍高原の自然を守るために、自分たちができることを考える。  【授業後の課題】 話し合い活動の第1段階の活動班（3人1組）で、授業内や授業後に考えたことをまとめた成果物「乗鞍新聞」を作成し、学級全体で共有する。

材を使用した。具体的には、第1時の教材として、乗鞍高原で貼り出されていた広告、生徒が実際に訪れたカフェ等の経営者が書いたブログ記事を用いた（資料②参照）。そして第2時には、地球温暖化の影響や社会の変化等によって様々な危機に瀕している乗鞍高原の自然を守り、持続可能なものにしていこうと示されたビジョン「のりくら高原ミライズ」を用いた。表2が学習内容である。

生徒が主体的・対話的に学び合える指導法と教材選びに工夫を行い、授業に取り組んだ。しかしながら、第1時と第2時の授業内容に自然なつながりを見出すことが出来なかった。そこで、表3のように指導案修正を行い、研究会当日の授業を実施した。修正内容は、生徒が第1時の学びを振り返るための「乗鞍新聞」を作成するアウトプットタスクの追加である。具体的には、授業者が指名した4名の生徒に、「乗鞍新聞」（A4サイズ1枚）を作成してもらい、第2時の導入で全体に向けて発表してもらう形で授業の導入を行うというものである。4名の代表生徒を指名する際には、それぞれ第1時で違う班に属しており、班で話し合った内容も共有しながら新

聞作成が行えるように意識した。また、授業での学びを生徒たち自身でさらに深めるために、新聞作成時にはICTを活用し、必要な情報を取捨選択しながら学びを深められることを目指した。

## （2）第1時の授業実践

第1時の授業では、生徒たちに乗鞍修学旅行の体験を振り返らせながら、自然が自分たちの生活や人生と関わっていることを認識させることを目的とした。読み物教材として、修学旅行中に訪れたGiFT NORIKURAを運営する藤江佑馬氏のブログ記事を用いた（資料②参照）。藤江氏は、「自分の大切な雪を守る」という強い思いから事業を立ち上げ、宿泊事業や飲食事業、映像制作事業などを通じて乗鞍高原の発展に取り組んでいる。その生き方を通して、生徒たちに自然が自分の人生と深くつながっていることに気付かせることをねらいとした。生徒たちにとっては、修学旅行に関するテーマでの学習は突然の内容であったが、導入時に乗鞍高原観光案内用ポスター（資料②参照）を用いて、自分たちが現地で見えた風景を提示し、自由に修学旅行を振り返る時間を

設けたことで、当時を思い出し懐かしむ機会とすることができた。さらに展開においても、実際の訪問先の経営者の経営哲学を学ぶことは、生徒に新たな発見を促した。例えば藤江氏の事例では、自然環境を守るという行為が、結果として自分自身や自己の夢を堅持することに繋がるという構造を理解するに至った（図1、2参照）。これは、対象への理解が自己の生き方へと内面化された好例といえる。

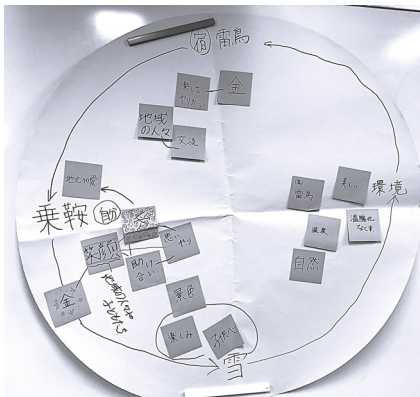


図1 話し合い活動の作成物①

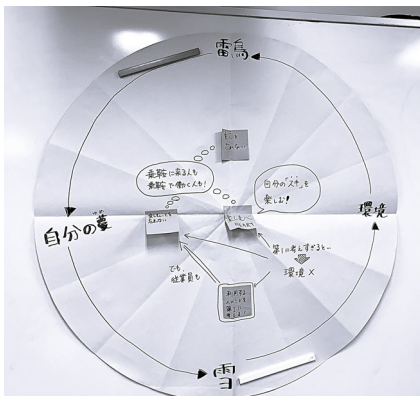


図2 話し合い活動時の作成物②

一方、第1時の課題としては、以下の二点が挙げられる。第一に、学習指導案「発問3」がねらいを深める質問として十分ではなかったことがある（資料①参照）。第二に、話し合い活動の時間が限られていたことがある。これらの課題を踏まえ、第1時と第2時の学習内容に連続性を持たせる工夫として、生徒による「乗鞍新聞」の作成を試みた。

### （3）第2時の授業実践—研究会当日の授業展開—

授業の導入では、第1時と第2時の学習内容に関連づけることを目的に、生徒が作成した「乗鞍新聞」（図4）を活用し、生徒主体による前時の振り返り発表を行った。新聞に示された中心的なキーワードは、「自然とともに生きる地域づくり」であった。生徒の発表や新聞の内容から、第1時の学習において、生徒は藤江氏の生き方を通して、自然を守る

ることが地域の暮らしや観光、動植物、さらに人々の心の豊かさを支える基盤であることを理解していたことが分かった。また、環境保全には、経営者と利用者の双方が意識を持つことが重要であるという認識が共有されていた。以上のことから、第1時の学習を通して、生徒は自然に生かされている自分や人々の存在に気づくとともに、環境に配慮した行動の必要性を自分事として捉えることが出来ていたと考えられる。このような学びを出発点に、本授業の中心的な活動に取り組んだ。



図3 「乗鞍新聞」について発表する生徒の様子



出典: コロンビア「LIFE IN NORIKURA Vol.4」

## 乗鞍新聞

### 自然とともに生きる道を学ぶ

藤江 佑馬さんの生き方から

製作者

11月8日 道徳

発行日

2025年11月8日

2025年 特別号





**伝える活動**

高学年が、観光客に対して、乗鞍高原の美しい自然や動植物の魅力を伝える活動を行っています。自然保護の取り組みや実際の体験を通じて、乗鞍高原の魅力を伝える活動を行っています。また、地域の人と協力して、自然環境の保全や山道の整備、観光客への案内などの活動を行っています。高学年が、観光客に対して、乗鞍高原の美しい自然や動植物の魅力を伝える活動を行っています。自然保護の取り組みや実際の体験を通じて、乗鞍高原の魅力を伝える活動を行っています。また、地域の人と協力して、自然環境の保全や山道の整備、観光客への案内などの活動を行っています。

**環境への配慮**

環境面への配慮では、ツアーの運営をワイルドツアーにする。ストローを紙製にする。リサイクルペーパーを使用するなど、廃棄物を減らす工夫を凝らしています。

図4 生徒が作成した「乗鞍新聞」

本実践の中心的な活動は、図5に示した「のりくら高原ミライズ」について考えることである。「のりくら高原ミライズ」は、令和元年に策定された乗鞍高原の持続可能な地域の理想像を示すビジョンである。環境・暮らし・観光を基盤に、住民や関係者が協働して地域を発展させる指針であり、自然保護や地域の魅力向上に向けた20項目の具体的な活動が示されている。授業では、話し合い活動を行う前に、図5に示された様々な活動が何を表しているかを、乗鞍修学旅行での体験と結びつけて想像できるように工夫した。その後、生徒が修学旅行で体験した図6に示した5項目を取り上げ、それぞれの必要性や実現に関わる人、実際に必要なものや方法につ



図5 のりくら高原ミライズ

いて考えた。話し合いは6人1組で行い、班ごとに話し合う内容を1つ自由に選ぶことで、生徒たちが主体的に学ぶ「自走」へのきっかけとした。生徒たちが選んだテーマは、図6に示した(1)が3班、(3)、(4)、(5)がそれぞれ1班ずつであった。

話し合い活動では、三つの工夫を行った。第一に、生徒の考えを膨らませ、整理しやすくするために、円形の模造紙「えんたくん」を使用した。「えんたくん」の活用によって、書き込んだ内容同士のつながりを可視化できるので、議論の過程が明確になった。第二に、活動時間(40分)を三段階に分けた。第1段階では6人班を3人ずつに分け、2つのグループにした上で10分間話し合わせた。第2段階は6人班に戻り、20分間意見共有した後、第3段階では学級全体による10分間の意見共有とした。さらに、第2段階ではペンの色を黄緑に指定し、乗鞍修学旅行に直接関係しない内容をピンクで囲み、重要なキーワードに赤線を引くことで、生徒

- |                         |            |
|-------------------------|------------|
| (1) ライチョウや野生動物を見ることができる | 【自然】       |
| (2) シラカバの伐採             | 【自然】       |
| (3) 番所そばや伝統野菜の栽培        | 【文化(食)】    |
| (4) 宿の魅力が洗練される          | 【文化(詠・風習)】 |
| (5) 多様なアクティビティ          | 【歴史・未来】    |
- 出典：「のりくら高原ミライズ」(乗鞍高原ワーキング)

図6 話し合い活動の選択テーマ



図7 テーマ決めの様子(6人班)



図8 話し合い活動①(第1段階)



図9 話し合い活動②(第2段階)



図10 話し合い活動③(第3段階)

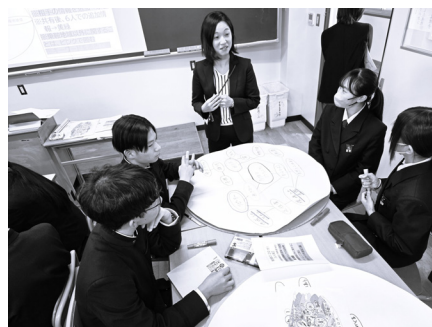


図11 机間巡視する様子

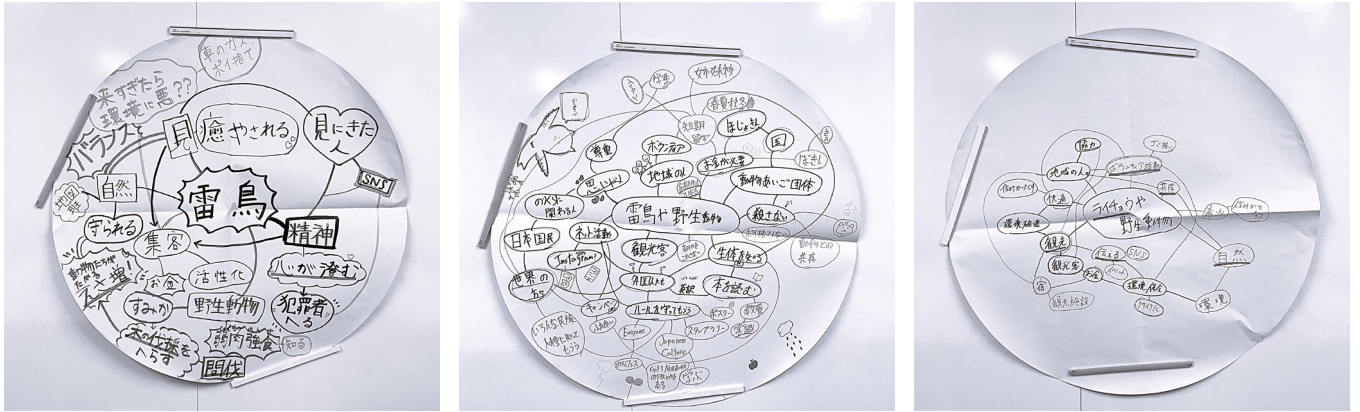


図 12 (1) をテーマとした作成物

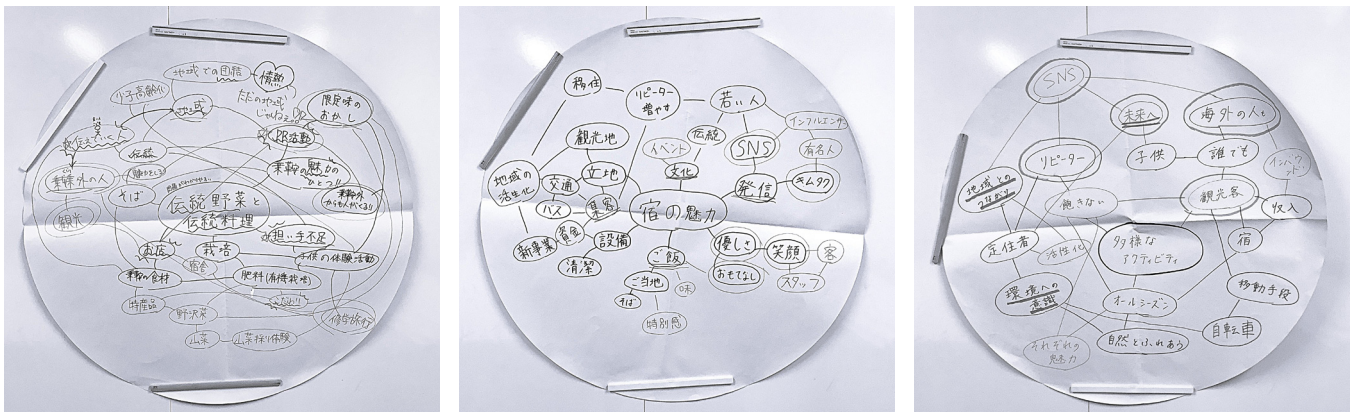


図 13 (3) をテーマとした作成物 図 14 (4) をテーマとした作成物 図 15 (5) をテーマとした作成物

が考えを整理しやすくした。第三に、授業者は生徒の活動中に机間指導を行い、生徒の思考を深められるようフィードバックを行った。例えば、環境保全について考えている班に対して、「保全」「保護」「保存」の違いについて投げかけるなどの支援である。これらの工夫により、生徒の思考を揺さぶり、議論を活発にさせながら、生徒は議論内容を可視化しつつ、主体的に意見をまとめることが可能となった。

図 7 から図 15 は、生徒の活動の様子と生徒が作成した「えんたくん」である。各班とも乗鞍高原の自然について活発に意見を交わし、主体的・対話的で深い学びが展開された。その過程において、思考の認知プロセスには個人差があることが明らかになった。具体的には、アイデアが浮かんだ瞬間に「えんたくん」に書き込み、可視化することで思考を拡張させる生徒と、諸要素の関係性を十分に整理・推敲した上で書き込みたいと考える生徒の存在である。班内では、「なんでそんなにいっぱい書くのよ!？」といった率直な戸惑いの言葉が発せられる場面があった。しかし、それは否定的な拒絶ではなく、自分とは異なる思考のテンポや表出量に対する戸惑いや驚きの表れであったと推測する。重要なのは、その言葉を受けた後も、書く側の生徒は自身の

ペースで書き込みを続け、問いかけた側の生徒もそれを遮ることなく見守っていた点である。このように、思考を可視化するツールを介して互いの思考プロセスの可視化が進む中で、生徒たちは自分と他者の「学び方の違い」を直接的に認識するに至った。その差異を否定せず、それぞれのスタイルを尊重しながら協働を継続させた姿は、多角的・多面的な視点を養う道徳科の特質が、本授業の学びの中にも発現していたことを示していると考えられる。

授業後の課題は、主に三つであった。第一に、話し合い活動の時間である。活動時間は 40 分で計画したが、発表準備を含む第 2 段階の時間は十分ではなかった。また、第 3 段階の全体共有の場では、4 班分のみでの発表にとどまるとともに、各班の発表を聞いた生徒が自由に考えたことや感じたことを語り合う時間も確保できなかった。この問題を解決するため、導入で用いた「乗鞍新聞」の作成を授業後の課題とし、完成した新聞を後日、学級で共有することとした。第三には、「えんたくん」作成時の生徒の思考プロセスの書き方が挙げられる。特に、生徒が出した考えがどのように他の要素とつながっているのかを示す方法である。これに関しては、ブレインストーミングの手法を授業者自身が予め指導し、

取り組む必要があると考えた。

#### (4) 生徒の反応

##### (4)-1 授業後の感想文からの見取り

本授業の目的の一つは、乗鞍高原の自然についての学習を通じて、修学旅行後から乗鞍高原の自然に対して自分がどんな思いを抱いていたのかという「自己を見つめること」ことであった。生徒は授

業での思索を通じ、実際に自分自身を深く見つめ直すことができた。例えば、ある生徒の授業後の感想文には、「乗鞍に行ったときは、乗鞍の表面しか見えておらず、（授業から乗鞍を）見ることによって、その裏にある乗鞍の課題や今後必要なことを見直すことができた」という記述が見られた。また、図16に示した生徒Aの感想からも、修学旅行当時の見方・考え方が、本実践を通じて「自分が現地の人

私は特に最後の先生の言葉が印象に残っています。そういえば修学旅行を振り返ると、ただただ「自然が綺麗だね」「いつもと違う土地って興味深いね」と思っただけで済ませていたのに、今回初めて「地域の人だったらどう考えるだろう」と考えられたのが不思議です。でもこれは、知らず知らずのうちに見地の方々が乗鞍をたくさん紹介して下さったからだと思います。こんな風に自然を守っていて、ここにはこんな魅力がいろいろ見えてほしいとちゃんと伝えて下さったからこそ今自分の中の乗鞍の記憶がはっきりしています。将来自分が何を志していかねばならないか分かっておいて、自分がいつか誰かに伝えるために、様々なところで出会った人々の思いを聞き逃さないようにするのは大切だと思います。

図 16 生徒Aの感想

乗鞍のことを考える時の視点も、自然から人々へ変わっていったと感じた。もちろん、根底に自然という関わりがあるから、そこから深く考えた時に、あの時体験したことは全て乗鞍の人達のおかげで成り立っていたと思いたし、それは修学旅行にこまらず行、たことのある全員に同じ気持ちがあるのではないかと考えた。なぜなら乗鞍が今の社会として成り立っているからだと考えた。それ以外に感じられたのは、マッピングをしていく時に、お店にPR活動と乗鞍外の人々が見つけたときだった。伝統を残すことはPRに頼り、伝統を知らなくても、お店が地域と地域外をつなげることで、伝統を知ることかできる。乗鞍は、一つの社会として藤江さんのように情熱をもて、また新しい出会いをもちたいような場所で、自然との調和が大切。つづいて、地域外との調和も大切。全てが調和している場所だと思った。

図 18 生徒Cの感想

修学旅行に行った時乗鞍の自然と環境保全されているなと思って、それと同時に自分がやらなくてはいけない大事なことがある、という謎の安心感を持っていったと思った。でも、今日の授業で、実際にしかり考えてみると、まだまだ乗鞍の保全だったり保存だったり穴がある部分が多いと思った。特に自分が思っている以上に乗鞍を色々とやること(課題)が多いと思った。自然を守るだけが乗鞍を守ることに繋がらなければならず、そもそも私達観光客側が自然を破壊する側になっていることもあって、乗鞍を守るというのは一筋縄ではいかないと思った。30年後の自分や未来の想像できるものはなかなか、その時に乗鞍が今の状態のまま残っているのってなかなか、今よりよくなる、みんな愛される乗鞍として残っていくなと思った。あと、授業面白かったです。田中先生おつかいさまでした!!

図 17 生徒Bの感想

○授業を通して、考えたことや感想を書きましょう。  
乗鞍の30年後の理想は現状とは異なるとは思いますが、また乗鞍の未来について考えると、前途多難ではあるように思いました。しかし観光客に伝えている地域住民の意識が高まることで、実現可能なようにも感じました。僕は以前乗鞍に行った時に、積極的に関心を示す姿勢が大事だと感じました。  
乗鞍に限らず、どの活動が増えるかは、よく元々の見方が環境破壊を減らすことか、減らすことか。  
これら30年間乗鞍の関心を高めることは非常に無理だが、時おり振り返り情報発信などをしていくことも環境保全に繋がります。

図 19 生徒Dの感想



表5 授業前と授業後の生徒の乗鞍高原の見方・考え方の変容（原文ママ）

<p><b>【本物体験の価値】</b></p> <p><b>（価値理解）</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・自然を観光資源としている地域はたくさんあるが、乗鞍には特に人との関わりが感じられる場所で、<u>正直行くまではただの秘境だと思っていたけれど、行ったことのある人しかわからない、人と自然の関わり方があり、決して無駄なものではない</u>と思った。</li><li>・話を聞くだけだったら、「あーたしかにそうだな」ぐらいにしか思っていなかったけど、<u>実際に現地に行って、見たり感じたりしたことで心から自然が大切であり、守っていかなければならない</u>と感じた。</li></ul> <p><b>（価値理解の方法）</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・私は乗鞍の自然を、<u>温泉だったり山だったり王道なことしか考えられていなかったけれど、動物で考えたら絶滅危惧種の雷鳥であったりと、人間以外にも考えていかなければいけないことがたくさんあって、それらを私達は守って大切にしていかなければいけない</u>と思った。</li></ul> <p><b>（認知）</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・乗鞍の表面部分だけを知って全部知った気になっていたが、<u>自然を守るためにすべきことなどを考えて、より乗鞍の素晴らしさを感じる</u>ことができたと思う。</li></ul> <p><b>【現地の人々の努力と情熱】</b></p> <p><b>（過去から現在へのつながりの発見）</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・修学旅行直後は自然のなかで過ごすのも良いなあとか景色と空気綺麗だったなあぐらいにしか考えてなかったけど、<u>班でもう一度考えてみると、あの自然は乗鞍の人たちが壊さないように守ってきたものなんだ</u>と思った。</li><li>・<u>乗鞍の自然も、決して自然と守られてきたものではないことに気づきました。地域のたくさんの方々が「ここを守りたい」という意思をもっており、地域を守るためにいかに魅力を魅力的に伝えられるか、興味を持ってもらえるかと一生懸命考えた取り組みを行っている</u>と思います。現地にいたときはそこまでは考えられなかったけれど、振り返れば質問をするとなんでも返してくださり、追加の情報まで提供してくれていました。</li></ul> <p><b>（過去から現在へのつながりの発見から当事者の視点へ）</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・修学旅行で乗鞍にいったときは、自然についてきれいだなと思ってそれだけだったけど、授業を通して、<u>その自然を守るために私達がなにかしないといけない</u>と感じた。また、<u>乗鞍で見てきた自然は、様々な人が守るために活動をして築かれたものなんだ</u>と思った！</li></ul>
---

たことが伺えた。さらに、乗鞍高原の自然に対する見方・考え方の変化を問う質問⑤では、85%以上（55名）が肯定的に回答した。記述内容を分析すると、その変容の要因は主に二つの視点に集約される。第一に、現地での五感を通じた「本物体験」の重要性に対する気づきであり、第二に、乗鞍高原の自然が人々の情熱と努力によって過去から現在へと持続的に紡がれてきたという歴史的・主体的側面への理解である。

以上の結果から、本実践は修学旅行における「本物体験」を、藤江氏の生き方を介することで「価値理解」へと昇華させる役割を果たしたと言える。その学習過程においては、表5の記述が示す通り、生徒は実体験を内省的に振り返り、「自然を守るために何をすべきか」という正解のない問いに向き合う学習プロセスを経て、乗鞍高原の自然の価値を再認識したことが確認された。

生徒の記述を具体的に述べると、「本物体験の価値」については、「話を聞くだけだったら、『あーたしかにそうだな』ぐらいにしか思っていなかったけど、実際に現地に行って、見たり感じたりしたことで心から自然が大切であり、守っていかなければならないと感じた。」という記述に見られるように、実感を伴う体験が価値理解の土台となっていることが確認された。また、「現地の人々の努力」に関する記述では、「修学旅行直後は景色と空気綺麗だったなあぐらいにしか考えてなかった」という生徒が、授業での内省を経て「あの自然は乗鞍の人たちが壊さないように守ってきたものなんだ」と、景観の背景にある「人の営み」にまで思考を深めている。これは、藤江氏の生き方を教材化したことが、生徒にとって「自然と自己の生き方の接点」を再発見する重要な媒介となったことを示唆している。

その一方で、表4に示した質問⑤において、「見

表6 乗鞍高原の自然についての生徒の学び

生徒の意識	生徒の学びの見取り	教育的効果
変容生徒 (55人 / 85%)	「美しい」から「人間との関わり・守る意義」への変容	本物体験の価値理解への昇華
維持・強化生徒 (9人 / 15%)	「大切である」という既有知識の保持	価値意識の再確認と内省の深化

方・考え方が変わらなかった（あまり変わらなかった）」と回答した15%（9名）の生徒の結果についても注目したい。これらの生徒の記述を確認すると、8名は「学習前から自然は大切に、偉大だと考えていた」と述べており、残る1名も「修学旅行前から、自然の保全活動について自主的に調べていた」と回答した。これらの結果は、本実践による意識の変容が見られなかったことを意味するのではなく、生徒が既に抱いていた自然保護への高い意識が、藤江氏の生き方や本物体験と合致し、自身の価値観を再確認・強化する機会となったのではないかと考える。つまり、本授業は意識変容を促すだけでなく、既存の価値意識を構造化し、より確かなものへと定着させる機能も果たしたと捉えられる。以上のことから、本授業での生徒の学びは、表6のようにまとめることができる。

(4)-3 アウトプットタスク「乗鞍新聞」からの見取り

授業後には、話し合い活動の第1段階とともに活動した3人組での「乗鞍新聞」の作成を課した。あ

えて6人班ではなく、3人組という小集団を編成した理由は、一人ひとりの思考をより色濃くアウトプットタスクに反映させるためである。実際に生徒たちが作成した新聞を以下に示す。

図21の記事から、本実践を通した生徒の学びのプロセスが読み取れる。生徒たちは乗鞍高原への訪問や歴史的事実の習得を経て、地域の現状を再考し、未来の在り方について思考を深めている。特に、自然を人間が一方向的に守る「保護」の対象として捉えるのではなく、自然と人間が互いに恩恵を享受し合う「共存共栄」を目指すべきであるという視点に至った点は重要である。この目的に向けて、自分たちが出来ることを考えるために、生徒自らがホームページで情報を検索するなど、解決策を主体的に探究する姿が見られた。以上の変容から、本授業が主体的・対話的で深い学びを促す契機となったと言える。

図22の記事においても、乗鞍高原の伝統を継承する地域社会を基盤とした自然と人間との共存の重要性が指摘されている。また、両者が融合する乗鞍高原には、実際に「乗鞍に行ったことがある人にし



図21 乗鞍新聞①



図22 乗鞍新聞②



図23 乗鞍新聞③

か分からないもの」があると、訪れた者にしか理解し得ない価値があると言及されており、乗鞍高原での本物体験が地域の課題を「自分事」として捉え、その本質的な価値を理解するための基盤となっていることが示唆された。さらに図23では、こうした伝統や環境が今日まで継承されてきた背景に、地域住民の深い地域愛に裏打ちされた努力と執念があったことが述べられている。生徒たちは、景観の美しさといった表面的な理解に留まらず、それを維持し続けてきた人々の精神や歴史的背景にまで思索を広げていることが見て取れる。

以上の考察から、本実践は生徒にとって単なる知識の習得に留まらず、乗鞍高原の自然について多面的な側面から考える機会となったといえる。生徒たちは、現地での本物体験を起点として、乗鞍高原が抱える課題を自分事として捉え、その背後にある人々の努力や歴史的な脈へと視座を広げることができた。そして最終的には、生徒たちが、自然を一方的に保護する対象から、人間社会との関わりの中で保全すべき対象へと認識を転換させ、共存共栄を未来の指針として見出したことは、本実践が単なる知識習得を超え、価値観の再構築を伴う深い学びとなったことを証左している。また乗鞍新聞作成過程の中で見出された、ホームページの検索や解決策の模索といった行動から見られる生徒の「主体性」も本実践における大きな成果である。

#### （5）結論—本授業のねらいは達成されたのか—

本実践の目的は、乗鞍高原での修学旅行という本物体験に学習的な意味付けを行い、そのプロセスを認知科学的な視点から捉えることで、生徒の学びの深化を可視化することであった。実践の結果、本稿「（4）生徒の反応」で詳述した通り、本授業は「思い出し」としての修学旅行体験を新たな価値理解へと昇華させる契機となった。生徒たちは乗鞍高原の自然を単なる景観としてではなく、人々の営みや持続可能性といった多面的・多角的な視点から再構築して捉えるに至った。また、乗鞍高原の自然をテーマとした主体的・対話的な学びのプロセスの中で、他者の多様な見方・考え方に触れ、自己の価値意識をさらに構造化・深化させる深い学びにつながったといえる。分析手法においても、本稿（4）-2の図20に示したテキストマイニングが、目に見えにくい「認識の変容プロセス」を客観的に可視化する上で有効であった。さらに、（4）-3で提示した「乗鞍新聞」の作成過程では、生徒同士が話し合いながら、情報を分析・統合していくことが必要となる。このような学びのプロセスは、本実践の正解のない

問いに対して、生徒が自ら答えを導き出したり、そのために様々な情報等にアクセスしたりするなどの「学びの自走」が達成されたことを示している。以上のことから、本実践のねらいは、おおむね達成されたと考える。

#### （6）課題と展望

本実践では、修学旅行での体験活動に学習的な意味付けを行う重要性を示したが、同時に今後の課題も明確になった。第一に、自然を「自分事」として捉え、行動への意欲を高めた生徒たちの意識変容を一時的なものに留めない工夫が必要である。つまり、日常生活における持続的な行動変容へと結びつけ、定着させていくための継続的なアプローチが求められる。第二に、情報の分析・統合の過程において、生徒の発達段階や習熟度に応じた個別最適な支援の在り方をさらに精査していく必要があると考える。今後は、生徒が作成した「乗鞍新聞」を実際に乗鞍高原の地域社会へ発信するなど、実社会とつながる実践へと発展させていきたい。また、本実践で提案した「ホンモノ体験を生かした道徳授業」のモデルが広く教育現場に普及し、各学校が修学旅行の軸に据える多様な学びをテーマに、生徒の深い学びが実現されることを期待したい。

### Ⅲ. 研究協議の記録

#### （1）授業の感想と授業者に対する質問

##### 参観者

私の子どもが2年前に乗鞍に行っており、生活態度に大きな変化があったように感じました。ただ（本人の生活態度の変化は）環境や中身を自覚しての変化ではなく、乗鞍での多様な気づきが、整理・統合される前の「生きた体験」のまま並列的に持続していたのだと思っています。本授業では、生徒一人ひとりの異なる視点や深い気づきを編み合わせ、乗鞍での体験を多面的に意味づける構造にすることで、単線的でない、重層的な学びが成立していた授業だったと思います。

##### 参観者

授業で使用した新聞は、授業時間内で作成を行ったのか、それとも宿題として行ったのか知りたいです。

##### 授業者（田中）

新聞作成は授業外で行いました。第1時の授業は10月31日に実施し、その後の連休を利用して、子どもたちに家で新聞を作成するように伝えました。生徒たちは、Line等で意見交換を行いながら、火曜日（11/4）にはほとんど仕上げてくれていました。

#### 参観者

子どもたちが活発に議論しているのが印象的でした。日頃の授業で話し合いの土台を作られているのだと思います。質問として、授業デザインの意識点や、道徳の複数回扱いの工夫をお聞きしたいです。

#### 授業者（田中）

普段から意識している点は、子ども同士の対話です。一方的に教え込むのではなく、少人数グループ（主には4人班）で意見共有を行っています。授業を複数回扱いにした理由は、一時間で「自然」について深く考えるのは難しいためです。まずは「自然」と自分との関わりを自覚させる時間を第1回目に設定し、第2回目で具体的なテーマについて考えさせました。授業後に想定していた生徒の答えとしては、「自分はまだ自然を自分事として考えられていなかった」と振り返ることでした。子どもたちの感想からも、多様な考えが見られたので良かったと感じています。授業での意識点は、話し合い活動の場面で円卓形式での作業を行ったことでした。初めての試みでしたが、思考の可視化には有効でした。書きすぎる子や控えめな子のバランスに課題はありますが、他者への気づきという面では意義があると考えています。もう一度自分たちで何が大事か深めてみる時間があればいいなと思っていましたが、時間の関係で難しく…。ただ、子どもたちに感想ともう一つ課題として『乗鞍新聞』を作らせました。3人班で作る課題です。そこでどのように子どもたちの思考が深まるかを見るつもりです。

#### 参観者

普段のクラスづくりで、環境面や関係性で大切にしていることがあれば、教えて下さい。

#### 授業者（田中）

クラスづくりで大切にしていることは、主体的に動くことを重視することです。基本的にこちらから声をかけることは少なく、子どもたち自身に考えさせることを大事にしています。今日見ていただいた36人学級では、学校に来ていない子もいますが、常に36人で一つのグループだという意識を持たせています。話していない子にも『どう思う？』と声をかけることを大切にしています。一人ひとりがリーダーであることを伝えることも重視しています。環境面ではタイマーを使用して時間の区切りを意識させています。

### （2）小林将太先生（大阪教育大学）からの指導助言

附属中学校3年生が自然の中で過ごした体験は充実したものであったが、大人の視点から見ると、その学びが十分に言語化・概念化されていないという

課題も見られた。この点を認知科学と道徳教育の観点から考えると、直感的で無意識に働く「速い思考」と、熟慮を伴う「遅い思考」が同時に機能する「二重過程理論」が基盤となる。自然の美しさや心地よさを感じることは速い思考によって可能だが、自然を守る判断や倫理的葛藤に向き合うには、意識的でスローな思考が不可欠である。自然環境を保全する判断は自動的に生じるものではなく、特定の経験や振り返りを通して形成される。幼少期の自然体験は自然認知に影響を与えるが、体験のみでは十分ではなく、意味づけを行う学習が重要となる。

本授業では本物体験を学びの中心に据えることができた一方、1時間目の展開には改善の余地があった。体験の背景にある認知の仕組みを整理し、新聞活動などを通して、一般化可能な学びへと深めることが今後の課題である。

### （3）指導助言者と授業者への質問

#### 参観者

1時間目の展開がどのように進んだのか、もう少し知りたいです。

#### 授業者（田中）

最後に取り組んだのは、藤江さんを参考に本物体験と結びつける活動です。修学旅行からの記憶を思い出させ、自然との関わりをサイクルとして捉えさせることに苦戦しました。藤江さんの存在は遠いですが、改善すれば子どもたちの思考をさらに深められたと思います。

#### 参観者

藤江さんに全員なれるわけではありませんが、子どもたちは大いに（藤江さんに）影響を受けています。「自然を守ることは自治や生涯学習の基盤である」と実感できたのは素晴らしい成果です。

#### 参観者

道徳化された教材はよくありますが、多くはスローな思考を必要とするものが多いと思います。しかし、今回のように意識的に「熟慮化」するプロセス、体験学習では続かなかった「自然を大切にすること」を前に出す手法は、他にも応用できると思います。特に中学生の発達段階を考えると、スローな思考を促す効果的な方法があれば知りたいです。教室という空間でどう促すかは非常に気になります。

#### 指導助言者（小林先生）

道徳の議論の中では基本的な趣旨は変わらないと思います。バックグラウンドの解説にもある通り、気づいていないことに気づく、つまり自覚されていない経験を認識することが大事です。例えば、あまり関わりのないことでも「普通はこうだ」と思って

いたことが、実はそうではない場合があります。その切り替えが重要です。昭和の道徳授業では、熟慮よりも登場人物に自分を重ねることで気持ちを引き出し、その後に生活の話に広げる形でした。しかし現在は、「二重過程理論」に基づき、熟慮を促す方向に向かっています。理論的には、二重過程理論に沿った授業づくりは大切です。

今回の附属中学校3年生の授業では、具体的な体験を通じて対象化することを期待しました。小学校低学年では難しいですが、学年や扱う内容に応じて効果の程度は変わります。大学の授業では、事例としてさだまさしさんの『償い』の話を取り上げます。交通事故で被害者に金銭を送り続ける加害者の話で、中学生にとっては理解が難しい行為ですが、作品として「誠実さ」を描くことで熟慮を促します。このように、「自分自身の考え方を見つめること」が手がかりになります。

#### 参観者

私は、スローとファスト、熟慮と直感のつながりが鍵だと思います。問いをどの段階で設定し、子どもたちに振り返らせるかが重要です。出てきた問いを記録し、関係性を明らかにすることも有効です。

#### 指導助言者（小林先生）

理想と現実を結びつけるため、具体的な自然体験と自分の目標を結びつけるロールモデルに出会うことは大事です。スローとファストの関係もここにあります。

#### 参観者

今回の問いの設定や学びを深める工夫についてです。感想文の中で面白い子の意見がありました。意見を聞くと、途中で考えを変えた理由やプロセスが見えてくることがあります。こうした声を拾うことも重要です。授業後に新聞を作らせたり、インタビューで体験や気づきを深めたりすることも可能です。この活動で子どもたちがメタ認知し、自分の考え方を振り返る過程が実感できました。

## IV. おわりに

本授業のねらいはおおむね達成されたが、本実践を認知科学的に捉える場合、修学旅行中の充実した本物体験をいかに「言語化・概念化」するかという点において、さらなる検討の余地が残された。乗鞍高原という大自然の中での非日常体験を「綺麗だな」「空気がおいしいな」という情緒的な満足（速い思考）で終わらせるのではなく、言語化・概念化のプロセスを経て、多角的・多面的な視点から直感的な感情を分析する「遅い思考」を起動させることで、生徒は初めて倫理的葛藤や社会的な課題を構造

的に理解することが可能となる。二重過程理論の観点に立てば、自然の心地よさを直感的に捉える「速い思考」に対し、共存共栄という概念の獲得や保全の判断、あるいは倫理的葛藤に向き合うには、意識的で熟慮を伴う「遅い思考」が不可欠である。このような視点に立ったとき、本実践では本物体験を学びの中心に据えることはできたものの、今後それらを価値意識へと定着させるために、第1時から第2時にかけての学習デザインを再考する必要がある。体験のみに依存せず、適切な意味づけを行う学習を通して、個々の経験を一般化可能な学びへと深め、この認知の仕組みに基づいた授業設計の深化について模索することを、本実践の成果を土台とした今後の課題としたい。

## 参考文献

- のりくら高原ミライズ構想協議会（2021）『のりくら高原ミライズ』  
<<https://share.google/Y6u4xgkJPr2Z0aHBm>>  
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』  
<[https://www.mext.go.jp/content/220221-mxt\\_kyoiku02-100002180\\_004.pdf](https://www.mext.go.jp/content/220221-mxt_kyoiku02-100002180_004.pdf)>

【資料① 研究会当日の学習指導案】

「問い」と「つながり」で学びを深める道徳  
—乗鞍修学旅行でのホンモノ体験を生かした道徳授業—

授業者：田中 真理子

- 日時 2025年11月8日（土）10時00分～10時50分
- 学年 第3学年D組（男子18名、女子18名、計36名）
- 場所 高校1年D組教室（北西翼3階）
- 主題名 「自然とともに生きる自分」【D-20 自然愛護】
- 教材名 第1次「少年時代からの思いを、人生を通して表現し続けたい」  
（出典：Raicho ホームページ）〈https://raicho.jp/recruit/fujie/〉  
第2次「のりくら高原ミライズ」〈https://share.google/Y6u4xgkJPz2OaHbM〉  
（出典：乗鞍高原ワーキング）

6. 本学習の授業デザインについて  
本校では、毎年、修学旅行で長野県にある乗鞍高原を訪れている。乗鞍高原での滞在期間は、5泊6日という長期であり、生徒たちは6日間もの間、大阪とは全く異なる環境の乗鞍高原で過ごす。電車も走っていない。道を歩いても人にもほとんど出会わない。見渡す限りの大自然の中で過ごす「非日常体験」をする。本授業では、本校 77 期生（中学3年生）の共通した本物体験である乗鞍修学旅行を軸に授業設計を行う。授業設計を行うにあたって、生徒が修学旅行後に書いた感想文や、授業者がその後に行った生徒へのインタビュー調査から生徒たちの学びを把握したところ、修学旅行の目的であった「自分自身や集団づくりに向き合うこと」は達成されていることが分かった。その一方で、その環境を与えてくれた乗鞍の「自然」についての学びが十分に感じられていない生徒の姿を知ることができた。そこで本授業を通して、生徒に深い学びの機会を与えてくれた乗鞍の自然について考える機会を持つことで、生徒が自然と自分との関わりについて考え、自然に対する自分の向き合い方を模索し、自然を多面的・多角的な視点から捉えられることを目指す。  
乗鞍高原は、地球温暖化の影響や社会の変化等によって、自然環境が失われる危機や、豊かな自然観光資源を活かされず、観光地として持続できない危機など、様々な危機に直面しており、自然に関する問題は喫緊の課題である。そのため、本授業のねらいとする内容項目D20「自然愛護」について、乗鞍修学旅行での本物体験と本授業での学びを重ね合わせながら、乗鞍高原が抱える自然に関する問題を自分事として捉えることを通して、これまでの自分自身の自然との向き合い方について考え、自然を多面的・多角的な視点から考える学びをデザインする。

7. 生徒の学びの履歴

本授業は、全2時間計画で実施する。

時間	学習内容
第1時	(1) 乗鞍高原の課題について知る。 (2) 乗鞍高原の自然を持続可能なものにしていくことを藤江佑馬さんの生き方に触れ、自然と自分の生活とのつながりについて考える。
第2時 【本時】	(1) 乗鞍高原 将来ビジョン「のりくら高原ミライズ」について考える。 (2) 乗鞍高原の自然を守るために、自分たちができることを考える。

8. ねらい  
藤江佑馬さんの生き方を通して、「自然」と「自分たち」は関わり合っていることを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解する。その上で、自然を守ることを自分事として捉え、進んで自然と共生していこうとする態度を育む。

9. 授業の展開

(1) 前時の展開（実施日は、10月31日（金）1限）

指導過程	学習活動と主な発問	備考
導入 (8分)	●乗鞍高原への修学旅行を振り返る ●ポスター「Tune Life」について このポスターに込められた思いは何だろうか。 ・乗鞍の大自然の中で、心を癒してほしい。 ・乗鞍の良さを知って、何度も訪れてほしい。	・修学旅行の振り返りでは、生徒に意見を自由に出させる。
展開 (40分)	・藤江佑馬さんの紹介 ・教材の範読  【発問1】 藤江さんが人生をかけて取組みたいと思っていたことは何だろうか。 ・気候変動や地球温暖化、環境問題に取組むこと ・地球温暖化を止める取組み ・（社会に）インパクトを与える取組み  【発問2】 藤江さんの経験から、雪を守ることは、どんなことに繋がっていますか。 ・環境を守ることは、会社である雷鳥を守ること ・環境を守ることは、会社を守り、自分を守り、自分の夢や生きがいを守り、家族や社員を守り、未来を守りと、様々なことが繋がっていること  【発問3】 あなたたちは藤江さんの考え方に共感し、藤江さんが運営する GIFT NORIKURA で働くことになりました。働く中で、大切にしたいといえないことはどんなことだろうか。またそれはなぜだろうか。 本物体験・自走・学び合う 個人（3分）→班活動（27分）→まとめ（10分）	・藤江佑馬さんは、乗鞍で有限会社 Raicho を立ち上げ、宿泊事業（宿「雷鳥」）、飲食事業、ガイド事業、映像制作事業等に携わる。  【追究発問】 ・なぜインパクトを与える必要があるのだろうか。  ・自然環境を守ることが、巡り巡って自分や未来を守ることにつながることに気づかせる。  ・修学旅行で生徒たちが訪れた GIFT NORIKURA。生徒の中には、店員の方々にインタビューしたのもいる。乗鞍高原での本物体験が、生徒たちの意見の中に含まれるようにしたい。  ・自然を守ることは、一人では成し遂げることが出来な

	・環境を守ること、雷鳥、自分の生活とのバランス ・沢山の観光客が集まるように、魅力を発信できる店であること ・会社のみならず目標を共有し、協力し合うこと ・持続可能であること	いものであることを押さえる。（地域・観光客…、関わる人すべての協力が必要）また必要があれば、自然を守る3つの視点（保護・保全・保存）を確認する。
終末 (2分)	●乗鞍高原が直面している課題について知る ・気候変動・温暖化の影響 ・草原・景観の維持・生物多様性の保全 ・観光 ・脱炭素化への取組み	・乗鞍高原は、「自然資源（資本）」の地域であること、自然を守ることは、自分の生活に繋がっていることを確認する。

(2) 本時の展開

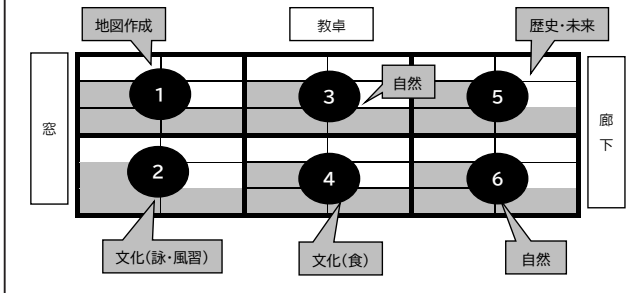
指導過程	学習活動と主な発問	備考
導入 (8分)	●前時の振り返り ・生徒が作成した「乗鞍新聞」を配布する。 ・作成した新聞をもとに、作成者が振り返りを行う。 学び合う  ●「のりくら高原ミライズ」について知る ・流動的ではあるが、現段階での30年後の乗鞍高原が目指す理想的な姿がイラストで示されている。	・生徒に前時の学習内容をまとめた「新聞作成」を依頼し、それをもとに生徒が前時の振り返りを行う。  ・乗鞍高原が、自然資源（資本）の地域であることを再度確認する。
展開 (40分)	【発問1】 乗鞍高原の理想的な状況は、ミライズに示された状況です。イラストの中の(1)～(5)は、乗鞍高原の未来のために、「なぜ」必要なのだろうか。またその実現には、「誰が」「どのように」関わる必要があるのだろうか。 本物体験・自走・学び合う 認知科学	・班活動を行う。班構成は、修学旅行でのテーマ活動班（6人×6班）を基本とする。 ※テーマ活動の内容は、「地図作成」「自然」「歴史・未来」「文化（食・詠/風習）」の5つであった。
	【選択テーマ】 (1) ライチョウや野生動物を見ることが出来る【自然】 (2) シラカバの伐採【自然】 (3) 番所そばや伝統野菜の栽培【文化（食）】 (4) 宿の魅力が洗練される【文化（詠/風習）】 (5) 多様なアクティビティ【歴史・未来】	
	班活動準備・班活動①（10分）→班活動②（20分）→全体共有（10分）	

	班活動準備 ・修学旅行でのテーマ活動班（6人×6班）に分かれて、5つの選択肢から自由にテーマを決める。  班活動① ・テーマ活動班（6人×6班）を2グループに分け（3人×12班）で、班活動を行う。  班活動② ・テーマ活動班（6人×6班）に戻り、活動内容を共有、考えを深める。 ・意見をまとめ、発表の準備をする。 ※発表者も決定する。	・テーマ選択を自由にする ことで、生徒の主体性を大切にする。 自走へのきっかけ  【ステップ1】 ・それぞれのイラストが、「誰（何）が」「いつ」「どこで」「何を」している様子なのかを確認する。  【ステップ2】 ・現地の人、観光客、以前関わったことがある人など、様々な視点から考えられるように工夫する。 ・立場が変われば、守り方も変わることを押える。
	全体共有 ・選択テーマとそのテーマを選んだ理由 ・【発問1】に対する考えの共有  【追加質問】 (1)活動中、どんなことに気づき、どんなことを考えたか。 (2)どんな問いを見つけ、新たな発見をしたか。	【ステップ3】 ・何が過度に優先し過ぎることによって、その他のものへのリスクへと繋がることにつながる。  【ステップ4】 ・自然を守ることは、持続可能でなければならないという視点についても考えを深められるようにする。
終末 (2分)	●授業者の振り返り  【課題】 ・各班(3人×12班)で、本授業での学びをまとめた「乗鞍新聞」を作成し、後日提出する。 ・新聞は後日、学級通信等で共有する。 学び合う (自走)	・感想書きと課題の連絡は、控室に戻って行う。（5分程度）

10. 評価の視点

- (1) 自然について、多面的・多角的な側面から捉えることができたか。
- (2) 自然を守ることが、持続可能なものであらなければならないことに気づくことができたか。
- (3) 自然に生かされている自分に気づいた上で、自然の偉大さを感じたり、自然を大事にしたいという思いを持つことができたか。また自然を「何かを得るだけの対象」として捉えるのではなく、「何かを返す」必要があるという視点を持つことができたか。

11. 教室環境



## 【資料② 第 1 時で用いた教材】

（乗鞍高原観光PRポスター）



【第 1 次：読み物教材】

### 少年時代からの思いを、人生を通して表現し続けたい

Raicho 代表 藤江 祐馬

Raicho は、2023 年 9 月に創業 9 年目を迎えました。

創業時に思い描いていた理想はほぼ現実となり、自分が人生をかけて取り組みたいと思っていたことに、事業を通して取り組めるようになってきました。理想を目指す中で生まれた新しい出会いを通じて、Raicho の可能性はどんどん広がり、過去に想像していなかったことが新しい夢やゴールとして見えてきています。（中略）

#### ●僕の原点

僕の原点は、「雪がなくなったら嫌だ」という思いです。

僕は、雪がすごく好きな子供でした。出身は千葉で、雪があまり降らない地域だったんですが、年に一回は必ず 10 センチ、15 センチくらい積もる日がありました。そんな日は両親や友人と、もうとんでもないくらい遊びまくったんです。それが、本当にめっちゃ楽しかった。そんな体験から、「雪が降ると絶対楽しい！」という感覚が、自分の中に根付きました。今でも「雪遊びってめっちゃ楽しいじゃない！」と思っています（笑）。これだけ楽しくて、大人も童心に帰って楽しめる自然のものってほかにない？と。雪の中で遊ぶことは、自分の中の全ての喜びに繋がっている気がします。

でも成長するにつれ、全く雪が降らない年が出てきました。ちょうど京都議定書という、地球温暖化に関する宣言が出された頃でした。当時の社会の先生がどういふものかを教えてくれて、授業の中で「一人ひとり調べて新聞をつくろう」ということになって。すごく一生懸命に調べて書いた記憶があります。環境が破壊されたら、大好きな雪がなくなってしまう。僕が心から喜んだり、楽しいと感じられる存在がなくなってしまう。「それだけは絶対に嫌だ」と思いました。子供ながらに、なんとかしなきゃと思った。高校に進学しても、その思いは変わりませんでした。すでに「気候変動や地球温暖化、環境問題に人生を通して取り組む」というのが、自分の中のテーマになっていましたね。だから大学も、環境と気象学を学べるところを選びました。でも色々学ぶ中で、何もできない自分に気づいたんです。結局、当時の自分にできることなんてゴミ拾いくらい。もっとインパクトを与えることをやらないと、地球温暖化を食い止めることはできないと感じました。そのためにはまず、自分が経験を積んで成長していかなければならない。

だから、成長できそうな会社に就職して、めちゃくちゃ動きました。社会人 10 年間で修行として捉えて。経験を積んで成長しないと、環境に対して何もできないと思いました。そうやって働いてある程度の区切りがついたところで、もっと自分のやりたいことをやるために事業を立ち上げました。それが 2015 年のことです。事業継承というかたちで乗鞍の宿を引き継いで、宿をやりました。

最初の 3 年間は、黒字を目指すことに徹しました。まずビジネスとして成立させなければ、何も生み出すことができないので。やっと黒字になり始めた頃、乗鞍観光センター 1 階の店舗が空くという話を聞いたんです。そのとき、ようやく自分の思いを表現できると思ったんですね。今まで自分が抱いていた、「気候変動や環境問題に対策をしていきたい」という思いを、この場所で表現できるんじゃないかって。そうして始めたのが、GIFT NORIKURA です。

同じ時期、周りでも同じような動きが現れ出しました。「のりくら高原ミライズ」というものが、2021 年 3 月に策定されたんです。これは、乗鞍が地域として、地球環境に対して先進的に取り組んでいこうということ、ビジョンとして宣言したものです。乗鞍は自然資本の地域です。観光資源も、普段食べているものも、みんな自然の資源。だから、環境への意識が高い人が多かったんですね。松本市が脱炭素先行地域になったこともあり、乗鞍地域がカーボンニュートラルを達成していく一つのモデルになろう、という流れができてきたんです。だったら自分たちも、会社として一緒にやってみようよ、と、地域の取り組みに進んで関わりたいなりました。Raicho の活動と、世の中の流れがふわっとマッチしたと感じましたね。これはやらなきゃと思った。道が開けた気がしました。

雪を守ることは環境を守ること、環境を守ることは雷鳥を守ること。そのための活動を、今、Raicho という名の会社で行っている。本当に運命みたいなものです。いろんなことが繋がって、物語になっていますね。不思議と。冬のスノーシューツアーでは、山の中でそり遊びをするんですが、みんな夢中で楽しんでくれるんですね。大人の人が、「うわあああ！」って大歓声上げて（笑）。その姿こそ、幸せのすべてな気がします。あの楽しさを味わうことが、人生の醍醐味じゃないかな。それをなくしたくない、ただその一心でここまで来た気がします。

出典：「有限会社 Raicho」Recruit | Raicho inc.  
<<https://raichoinc.jp/recruit/fujie/>>

<sup>1</sup> 人間の活動によって排出される CO<sub>2</sub>（二酸化炭素）などの温室効果ガスの量を、吸収や除去によって実質ゼロにすること



# NORIKURA NEWS LETTER

**長野県松本市乗鞍**

「これは乗鞍高原で有名な番所大滝。落差10m、幅11mからなる直流と水が落ちる轟音が見応えたっぷり。」



「地元の農家による、有機栽培や、減農薬での取り組みが評価され、長野県松本市で認められた。」

## 乗鞍の伝統野菜、伝統料理を残すため

乗鞍高原には様々な魅力的な野菜が多数存在する。番所そばや、花豆、野沢菜など、乗鞍高原の特有の恵まれた気候や食文化などを生かした野菜は、その土地でしか味わえないゆずりと食味の良さが魅力である。また、健康にも優れており、農薬を使わず安全な野菜として、乗鞍高原を含む信州全体で、「信州の環境にやさしい農産物認証制度」に因って認定された。(左下の写真)

しかし、多くの地域で、少子高齢化による、跡継ぎ問題が発生してしまっている。乗鞍高原でも例外ではなく、伝統料理の継承が危ぶまれている。その問題を乗り越え「伝統」を守っていくには「伝えていく人」の存在が重要となってくる。乗鞍では乗鞍という「地域」と、「乗鞍の外人」の二種類の伝えていく人がいる。「地域」では、乗鞍の伝統を守るための役員が乗鞍への情熱を持って活動しながら、PT活動や子供の教育が行われている。そのうえで、この問題を解決するには「乗鞍の外人」にも魅力を伝え、取り組みに巻き込んでいく必要がある。そのために乗鞍では観光に来た人にも、伝統料理のそばの魅力や伝説、伝統野菜である野沢菜の葉を製作するなど様々な工夫が行われている。

**番所大滝の水質調査講座ああ!!!**

用意するのは、PH試験紙とCOD(科学的酸素供給量)と傘。  
まず、傘を滝の方に開いて、根性で飛んでくる水溜を採取する。取れた水溜で水質を測ることができる。コレおすめなのぞびみんなんもやってみよう。  
大滝の水質はpH: 4.5、COD: 踏だった。(CODの値が高いほど、水中に有機物が多く、汚れていることを示す。だいたい値に近い値が高く、紫色に近い値が低い。)

**乗鞍を舐めんじやねーよ**

乗鞍という伝統が残っているのは、やはり乗鞍に住んでいる人々の努力と執念だろう。この文化を何年も必死に守り抜いてきた現地の人々の活躍は私達の想像できない計り知れないものではないだろうか。乗鞍の人々の地域愛、私達も見習いたいところだ。

**乗鞍が人々を魅了する魅力とは**

私は、乗鞍が人々を魅了する魅力とは、普段生活していたら味わえない非現実感だと思う。学校や職場、電車の時間などいろいろなものに縛られてしまったおりに生活している私達にとって、解放された非現実的なまはり魅力的な中に入ったかのような自然で生活することはやはり魅力的なものではないだろうか。実際、私の周りにも乗鞍を訪れ日常に戻ると皆もう一度訪れたいと望む人が多い。それほど、魅力的な場所なのである。



↑上高地にある池の田代湖。鉄分によって赤く染まる池の風景は人々に驚きを与える。

# 乗鞍新聞



のりくら高原ミライズ

のりくら高原ミライズ=のりくら観光協会

## 未来を見据える乗鞍 乗鞍を守るためにできること

令和三年三月、乗鞍を次の時代へと進めるための取り組みとして、「のりくら高原ミライズ」が策定された。この計画は、観光と暮らしの両立を目指すもので、持続可能な環境の保全柱としている。

「暮らし・観光」から様々な取り組みが行われている。上層は、乗鞍地域の理想的な姿を現し、次世代へつなぐための指標を示している。

そこで私たちは、「乗鞍の伝統野菜と伝統料理を守る」という視点で何が出来るか話し合った。乗鞍の課題としては、少子高齢化の影響で栽培を行う人が減少していることが挙げられる。これに対し、伝統野菜を使った料理の提供拡大や、体験型観光を充実させることで地域の魅力を提案された。また、その強化と地域内外の連携により、「伝統を守りながら地域の活性化につなげる」ことが期待される。

## 乗鞍の取り組み

人と環境の共存を目指すべく、乗鞍では人と自然が繋がる地域づくりが行われている。例えば、小学校など協力した自然観察の体験学習、自然体のワークショップなど、様々な取り組みが行われている。こうした取り組みが、地域住民や観光客と共に参加でき、自然への関心がより広がっていく機会となっている。自然を軸とした交流が、今後も続けられ、このことにより、人と自然が深く結びつく乗鞍の姿が期待される。そして、観光拠点を増やすため、乗鞍の整備、新たな施設を作ることも進めている。

## 乗鞍の魅力とは

乗鞍では、自然と人の繋がりが行われている。そして、地域が一丸となることで、地域外の人も同じ輪として、自然の流れを感じることができる。

確かに、有名な観光正装があるわけではなく、しかし、都立にはありえない、乗鞍に行きたいという思いが、私達に伝わっている。乗鞍には、乗鞍という魅力があると思う。



この湖にある環境は、クラゲの生息地や、地味な風景に魅了されている。乗鞍を魅了する魅力とは、普段生活していたら味わえない非現実感だと思う。学校や職場、電車の時間などいろいろなものに縛られてしまったおりに生活している私達にとって、解放された非現実的なまはり魅力的な中に入ったかのような自然で生活することはやはり魅力的なものではないだろうか。実際、私の周りにも乗鞍を訪れ日常に戻ると皆もう一度訪れたいと望む人が多い。それほど、魅力的な場所なのである。

# 乗鞍新聞 特別号

2025/11/24(月)

## 雷鳥や野生動物を守るには?

私達は11/8(土)の道德の授業で「のりくら高原ミライズ」の一環である「雷鳥や野生動物を守るには?」ということについて考えた。まずは守るために第一に大事なことは「殺さない」ということである。そのためには動物愛護団体や国が保護することが必要であると考えた。



「殺さない」以外の視点で考えると「生態を知ってもらう」ということである。乗鞍に初めてくる観光客に対して、InstagramなどのSNSで呼びかけことやポスターなどを貼ることが大事だと考えた。それに伴い、キャンペーンなどを開催するとも面白いかなと思う。

その他にも気持ちの面として「思いやり」「尊重」が必要ではないかとも考えた。

## 現実的に解決していく方法として

ではここからどのように現実的に雷鳥や野生動物を守っていくか。一番現実的なのは先程述べたようにSNSの活用だろう。そこで色々な国の人々に知ってもらう。もちろん外国人にも。そこで乗鞍高原という Japanese Cultureを知っていたらいいだろう。また外国の方々に乗鞍高原へ短期留学してもらうという方法も良いと思った。乗鞍に関わる全ての人に雷鳥や野生動物をよく知ってもらうための方法としては全世界へ発信するのが一番だと思った。

## Raichoが大切にいること

私達は2時間の道德を通して乗鞍高原が大切にしていることについて考えた。その中の例として出てきたRaichoでは、宿舎「雷鳥」を運営しながら環境保全の活動を行っている。そんな藤江さんが大切にしていることは「自然にかえる」ことであろう。Raichoのコンセプトでもあるこの言葉は「人と自然は本来一体であったにも関わらず、資本主義経済の中で距離が生まれてしまった。そんな中を人と自然が共存した豊かな未来を創る。」という想いがあるそうだ。(引用: Raicho公式HP 一部要約)

## 乗鞍高原・Raichoにとって自然とは?

乗鞍高原とRaichoにとって自然とは、地域の魅力をつくるまでであり、人々が心身を癒え、本来の自分に戻るための大切な存在である。乗鞍高原やRaichoではたくさんの自然に関する取り組みがされている。こうした取り組みから、自然は地域と人の未来を支える基盤だと考えられている。



出典: jalan.net

# 雷鳥や野生動物を守る



雷鳥や野生動物を守るには? 私達は11/8(土)の道德の授業で「のりくら高原ミライズ」の一環である「雷鳥や野生動物を守るには?」ということについて考えた。まずは守るために第一に大事なことは「殺さない」ということである。そのためには動物愛護団体や国が保護することが必要であると考えた。

## D4班

乗鞍には、多様な動物や野生動物が生息しており、私達はその命を守りながら地域とともに生きる仕組みをつくる必要がある。動物たちは季節ごとに移動し、短期間しか現れない種も多く、生態系は非常に繊細である。国や地域行政は、保全区域の設定や観察ルールの整備を進めているが、守るべきは制度だけではなく、動物への理解そのものだ。観光客や外国人に対しては、野生動物との適切な距離の取り方や、食べ物を与えないなどの基本的なマナーを伝えることが不可欠である。

また、地域の人やボランティア、学生などが連携し、観察会や学習企画を通して、動物と共存する文化を継承していくことも大切である。さらに、SNSによる情報発信や日本固有の自然文化の紹介は、乗鞍の魅力を世界に広げると同時に、保全活動への理解と参加を促す手段となる。野生動物を「殺さない」「脅かさない」ためには、人間側の行動変容が欠かせない。ともに生きるという視点を持ち、生態系が損なわれないように持続可能な方法で、地域全体で保護に取り組みを求められている。



雷鳥や野生動物を守るには? 私達は11/8(土)の道德の授業で「のりくら高原ミライズ」の一環である「雷鳥や野生動物を守るには?」ということについて考えた。まずは守るために第一に大事なことは「殺さない」ということである。そのためには動物愛護団体や国が保護することが必要であると考えた。



雷鳥や野生動物を守るには? 私達は11/8(土)の道德の授業で「のりくら高原ミライズ」の一環である「雷鳥や野生動物を守るには?」ということについて考えた。まずは守るために第一に大事なことは「殺さない」ということである。そのためには動物愛護団体や国が保護することが必要であると考えた。

